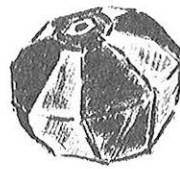


# 光の子



No.68 1996. 10. 1.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい（ペテロの第1の手紙第4章10節）



「夢・ふうせん」

え・中島英子

秋澄む

大利根の秋澄む空の深さかな

気休めの案山子気安く立ちにけり

天が下案山子に父も母もなし

太平の世や軍服の案山子立つ

突撃の命令もなし案山子立つ

敗走の兵のごとくに立つ案山子

大利根や光の子らに水澄んで

落合 水尾（『浮野』主宰）

# 信仰の血圧

ヨハネの黙示録 第3章15節～

理事長 福島 勲

江戸中期の僧であり国学者で歌人であった契沖は、「歌は胸中の俗塵を払う玉篇」といった。

これになぞらえて言わせてもらうと、キリスト教信仰は罪の穢れを払う玉篇である。この掃き清められたはずの人間が相も不変、罪の中にうごめいている。情けないことである。

契沖はかつて放浪の日々を送っていたとき、自然の美しさにうたれて自ら頭を岩角に打ちつけて死のうとしたと伝えられている。

はげしい性格の人か。物事に執着し己を忘れるかのごとき人であったのか。自然の中に浄土を見つけ、世俗の不浄さを厭うて散華しようとしたのだろうか。

だが、いまわたしは契沖を賞賛しようとは思っていない。信仰の熱い(?)と思われる人の一例として、挙げたまでである。

「わたしや嫌じゃよ、教団風呂は、三助多くて湯がぬるい」と川柳もどきに歌って教団を去っていった牧師がいた。

われわれの所属する日本基督教団は、多くの教派の教会が合併してきたのだが、その成立期、時代の潮流、動機などいろいろ絡みあって、いまだにだれもが満足のいく教団とはいえないようである。

しかし、わたしはこれでもキリストの教会と思っている。

聖書にみるコリントの教会も随分と困った教会のようだが、それでもパウロは神の教会と呼んでいる。

この神の教会に所属するわれわれが生ぬるい信仰で平然としていてよいはずがない。

ヨハネ黙示録の著者がラオデキア教会に書き送って、あなたがたは熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるい。熱いか冷たいかであってほしいと厳しく戒めている。

もちろん言葉の綾で冷たくあつてよいのではない。熱くなければならぬ。

ところで信仰の血圧計のようなものがあつたら、どのような表示があるだろうか。

最近わたしは家の近くの坂道を登って「しんどい」と感じた。

年であることには違いないが、血圧はと気付いて、曾てある人から貰っていたオムロンなる血圧計をとり出して計ってみた。

結果は表示されている年齢層の数値と大差はなかった。

サイレント・キラーと呼ばれている高血圧は突然、脳卒中で倒れたり、動脈硬化をきたし、心臓、腎臓病など併発し危険極まりない。(尾前照

雄著「血圧の話」岩波新書

ラオデキア教会の信仰病状は可成の重症である。ここは低血圧かもしれない。

金を買え、衣を買え、目薬を求めて塗れなどと奨められている。

二人の婦人が「深入りしないでやりましょう」と囁きながら、週報発送の教会の事務に奉仕しているのを聞くとともにしに耳にした。

教会の役員や各部署員達の中には、熱心のあまり、自己主張が強く他を痛めつける者がいる。

牧師(も我が強い)が気を遣うのはこの種の人たちである。この煩わしさを知っている者が、深入りしないで自分の信仰を保とうとする。冷たいのだろうか。

「世紀末宗教戦争マップ」(J・ホート著・時事通信社)をみると今や世界中の至るところで宗教の名の下に争っている。

キリスト教も例外ではない。アイランド、イスラエル、最古のキリスト教国といわれるアルメニアなどの悲劇を知らされる。

高まる宗教的血圧の恐怖を覚える。真の愛と健全な知性の欠ける過熱した信仰の熱さ、また冷却した信仰は、恐怖と憂いと隣り合わせである。

## エッセイ

### ある出会い

この夏、新潟へ行った。私は、ずっと以前から新潟へ行きたいとは思っていた。根拠は別にない。しいて言えば、私は北のまちが好きだという事ぐらいか。ところが、新潟市立美術館にフランスの画家ボナールの絵があると。ボナールだったら一度見てみたい。つまりこれが新潟行きの具体的な根拠となった。私は新潟行きの手配をした。二泊三日、宿はどこでもかまわない。ボナールを見て、あとはどこかをうろろして来ればそれで良い。そんなあいまいな旅行だった。そして、まずは、美術館でボナールの絵に会えた。余り大きくはない美しい絵であった。「浴室の裸婦」という絵である。例によって柔らかな色彩で上品な輝きがあった。私は充分満足した。他にザッキン等小品ながら見ごたえのある彫刻にも出会ってうれしかった。

予約したホテルOは、近代的な清潔感のあふれたものだった。食後にロビーに降りて行くと、音楽が聞こえて来る。引き寄せられるよう近づくと、ロビーの奥にあるピアノには、品の良い初老のピアニストが、次

ら次へと休みなく演奏を続けているのであった。

私の青春時代にヒットした懐かしい曲が多い。私はそこでじつくりと腰をすえることにし、ビールをとり演奏に聴き入っていた。実に気持ちの良い軽快な曲切れの良い、そしてロマンチックな曲が、連続して流れてくるのである。しかもCDなどではなく、私と同じ空間で、目の前のピアノで、同じ空気の中で奏でられている。それらの音楽は、私の青春時代の苦悩と希望、憧れ、そのものであった。

しかし、聴衆は私達夫婦と他に二人ほど。何とぜいたくな時間と空間。もったいない。私達はいつまでもいつまでもじつとそこに座っていた。ビールの追加を注文した時、ウェイトレスに私は思わず「あのピアノを演奏している方に何か飲み物でも差し上げたいのですが、失礼でしょうか。」と言った。彼女は「いえ、そんな事はありません。」と笑って答えてくれた。ではと言うことになり、長い演奏に区切りをつけたピアニストは、ゆっくりと私達の所へ近づい

てきた。

「先ほどは有りがとうございました。私はアルコールはだめなので、冷たいジュースをいただきます。」と丁寧に言って「私はこういう者です。が・・・。」と一枚の名刺をさし出した。意外な人物であった。稲川さんというその人は、アメリカに十五年ほど暮らし、帰国後は作詞をやる作曲をやるたぐさんのコマージュ・ソングも手がけられたとのこと。中には、私達の耳にもよく聞くものもいくつかあつてびっくりした。その上ピアノの演奏をやる。又、東京の或る一流ホテルでピアノを弾いていた事もあるとのことであった。しかしものともとは音楽畑の出身ではないのだというので又びっくりした。

深い知性、抜群の国際的センスの彼は、現在故郷へ帰り友人のこのホテルのオーナーに協力し、経営の面でも力を貸し、ピアノの演奏をも引き受けているらしかった。

そんなこんなで私は稲川さんと語りあううちに親しくなり、翌日夜は地元岩室の祭りに誘われ、案内してもらうことになった。

県立高校美術教諭

中島 睦雄

祭りは、初日であつて、神社から町へ御輿を移動する行事であつた。ほら貝を吹き、太鼓をたたき、上下姿の町役の姿もあり、古式床しくゆっくりと進む行列であつた。白の水干、黒えぼし。かつて週間新潮の表紙絵で、この町の祭りの行列をみた様な気がする。素朴でこの上なく美しい行列であつた。

祭りから帰ると、稲川さんは私の部屋まで来られ、御自分の作詞作曲になる曲のテープや資料などをくださった。

今回の旅行は、余り目的ののつきりしないものだった。しかし、その途中、私は思いもかけない出会いにめぐまれたのだった。もち論、いくつかの名所旧蹟も見物したが、私にとっては、この稲川さんとの出会いが、最も印象深い旅の収穫であつた。



## 2つの文化に生きる

2

日本キリスト教団東大宮教会  
バーガー 京子

戦後何でもやたらカタカナで言うとかっこがいいという時代があったようだ。その中で生まれた言葉の一つが『ハーフ』という言葉である。終戦直後は『混血児』などといういかにも忌々しい差別用語が出回っていたようだが、それによってこの『ハーフ』という言葉が置き換えられたわけだ。

最近、テレビで『二つの文化を生きる』という日曜スペシャルがあった。二つの文化を持つ様々な大人や子どもにインタビューしていく中で『私はハーフではない。ダブルスだ。半分ではなく二つだ』と答える人が多かった。この自覚は大人になるほど強くなる。幼い頃は二つの文化を持っていることに混乱したり、反抗

したり、片方の文化を否定したりと様々な経験をしていくが、その多くはハーフ（半分）でなくダブルス（二つの文化）という特別な経験をしていることに感謝し、それを誇りに思っているようだ。

番組の中で一番気になったのが戦後間もなく生まれたダブルスたちが殆ど声をそろえて言っている、「石を投げられたり、つばをかけられたりした」ことである。こんなことが本当にあったのだろうか、戦後暫く経ってから生まれた私にとっては信じられない話である。

中には「自分の国へ帰れ！」と、つばをかけられた人もいた。自分の国へ帰れと言われてもダブルスにとっては自分が生まれた日本は自分の国である。外見が違うからといって除け者にするのはあんまりである。けれど、このあんまりな話は日本だけで起こっていたわけではない。アメリカでもつい三〇年前までは黒人は白人が入るレストランや公衆トイレには一切入れなかった。日本人の母親、黒人の父親を持つ女性がアメリカのある街に転校したとき、自己紹介をした。「母は日本人で父はアメリカ人です。」と言ったとき、担任の先生に「どんなアメリカ人ですか？」としつこく聞かれ「黒人です。」と

言った途端、クラス全員の冷たい視線が彼女に向かい、その時完全に仲間外れにされたのを感じたと言っている。またアメリカ在住の日系アメリカ女性は、自分がどんなに白人と同じことをしても結局外見が違うから違う目で見られる。中味は関係ないのだ、という経験を述べている。また日本人と黒人の間に生まれたある男性は、アメリカで、朝はクロンボと言ってからかわれ、午後はジャップと言ってからかわれ、いい加減にいやになったと言っている。

親戚付き合いも日本側の家に行ってはいけないうの、父側とはつき合わないだの散々揉めた揚げ句、祖父の「みんないい加減にして仲直りしなさい。」の一言で親戚中交流を始めたという話もしている。こんな話をいくつも聞いていると何故か滑稽にも見えてくる。外見、文化が違うからと言って話もしない、家にも入れないなどと意地を張っているのはどう考えても心の狭い偏った考えとしか思えない。

現代社会はどうだろうか。国際社会と言っている中で、私たちは違う文化を認め、違う人種を表面だけでなく、心から受け入れているだろうか。世界のあちこちで戦争が起こっ

ていることを思うと、人間の争いはどこまで続くのだろうかと憂うつになってしまふ。

番組の最後に、神父らしきダブルスの男性がこんな面白いことを言っていた。「国際結婚がもっとも増えること、それが世界平和への近道になると思う。そして、二つの文化を持つ子どもたちこそ、未来を切り開くリーダーなのだ。」と。

因みに十二歳の息子に先日、「ハーフと呼ばれるのでダブルスと呼ばれるのはどうだろうか？」と一言聞いてみた。「ダブルス？、テニスじゃあるまいし、ばくはハーフでもダブルスでもない、母親が日本人、父親がアメリカ人の普通の人間でいるのがいい。」とのこと。

この先、もっともといろいろな人種が混じりあって、混血もハーフもダブルスも殆ど特別な意味がなくなつて、普通の人間同士が生きていく未来が来るのは、そんなに遠くはないような気がする。

きやぶのどきも学者  
母のことなど

山形大学医学部教授

富士郎 仙道

父は内科の開業医であつたが、いつも酒ばかり飲んでた。多分その事が原因の一つだと思ふが、五〇過ぎて脳卒中で倒れ、五十六歳で死んだ。ただ、人には好かれていた様で、周囲にはいつも多くの人がたむろしていた。独りで酒を飲むのが淋しくて、人を集めていたのかも知れないが、遠方の友人が来ると、料理屋に泊まり、何日も家に帰らない事が多く、困り果てた母と兄はまだ幼い私を料亭に迎えにやらせた。料理場に続きの隣の部屋で、私用に作ってくれた料理を食べながら、父を待っていた情景を今でもはっきりと覚えている。

母が亡くなってからもう何年になるのだろうか。どうした事か、近頃は母のことを思い出す事が多い。懐かしんでいると言うよりも、自分の生き様が、余りに生前の母のそれと似ている事を気付かされる機会が多くなってきたという事のである。

父は内科の開業医であつたが、いつも酒ばかり飲んでた。多分その事が原因の一つだと思ふが、五〇過ぎて脳卒中で倒れ、五十六歳で死んだ。ただ、人には好かれていた様で、周囲にはいつも多くの人がたむろしていた。独りで酒を飲むのが淋しくて、人を集めていたのかも知れないが、遠方の友人が来ると、料理屋に泊まり、何日も家に帰らない事が多く、困り果てた母と兄はまだ幼い私を料亭に迎えにやらせた。料理場に続きの隣の部屋で、私用に作ってくれた料理を食べながら、父を待っていた情景を今でもはっきりと覚えている。

三人の兄弟の中で末っ子の私を父は一番可愛がっていたふしがある。私とは五歳違いの兄は、母の大変さが分かっていて母の味方で、父には反抗的だったのだと思う。父も兄には厳しかったという。中の姉は、新潟の病院に父が赴任の時、秋田の実家に一人置かれてしまい、乳母の所で育ったせいも、当時は何となく影の薄い存在であつた。（今では何とも頼りがいのある姉であるのだが）。

父は酒ばかり飲んでたが、温厚な人柄で、子どもたちを怒る事などは殆どなく私自身は、高校時代に兄と取っ組み合いの喧嘩をした時に、「いい加減しろ」と一回怒られただけである。酒飲みでも偉い人なのだと思つていた。父が他界してから、兄弟で父を懐かしみ、彼の偉大さを讃えた。そんな時、母は「あなたたちはお父さんを美化している」とビシヤリと押さえた。

母は開業医の一人娘に生まれ、父の厳しい躰の許に育てられたという。いつも毅然としていて、決して他人に弱みを見せなかった。八十五歳で脳卒中で倒れた時、子どもたちと孫以外の見舞いを全て拒否した。自分の弱っている姿を他人に曝したくなかつたのだらうと思う。そして、いつも、いつも明日の事を思い煩つて

いた。いつも何かを考えていて、私に側にいると、暫くの後に「富士郎・・・はどうなっている」と、気になっている事を聞いた。何日か後に「富士郎・・・はちゃんとやつたか」と、今度は確認の質問である。

老年期、彼女は幸せそうで、通常は秋田の兄の処に居住していたが、時々姉や私の処に巡回してきた。本を読み始めるとすぐ眠ってしまうが、眼を覚まししている時はいつも、考え事をしている風であつた。こんなに思い煩っている、何を楽しみにこの母は生きているのだろうかと思つた。

脳卒中で倒れたのは私の家であつた。前日、私はかなり酒を飲んで帰宅し、あれこれと彼女に話した。以前は兄と2人で飲んでいて十一時過ぎると「いい加減にしろ」と五時に近い男たちを叱りに来た。でも、その日は、多分一時を過ぎていたと思ふが、文句も言わずに私の話を聞いていた。翌日、妻が母の異常に気づき、大学病院に入院となつてしまった。今でも、あの時あんなに遅くまで起こしておかなかつたら、気がかりになるような事を言わなかつたら、（本人はその時は余りこの事には気付いていず、妻に知らされて初めて分かつたのだが）もう少し長生きしたのになと思う事がある。

それにしても、あれほど異質な人間と思つていた母に近頃何と自分が似ている事か、あるいは似てきたのか、驚くばかりである。勿論、私は毅然としているわけでも、人に弱みを見せる事を極度に嫌うわけでもないが、近頃の自分には、「何をそんなに思い煩っているのだ。もっと人生を楽しんだらどうだ」と言いたくなる。何かをし終えても満足感が無く、すぐに次にしなければならぬこと、この段取りを考えている。奇異に思つていた母にそっくりなのである。

今この原稿をブラグアイの田舎のホテルで書いている。まだ乳児死亡率や妊産婦死亡率の高いこの国で、人々が自分たちで自分たちの健康を守っていくための手助けをしているJICAのプロジェクトで、十何回目の訪である。朝、鶏が暗いうちから鳴き始め、なんとも美しい朝焼けで明るくなっていく。時間はゆっくり、ゆっくりと流れていく。

それなのに、私はといえば・・・午後七時から女性の保健行政区長長の所でわたしたちの歓迎パーティがある・・・それまでにこの原稿を何とか・・・明日は・・・明後日は・・・。

そんなに思い煩うな。二・三日原稿が遅れても菅原君はそんなに怒らないだろうに。

# プリズム

河のほとり

旗井の家

夏休みの終わりに、「俺、坊主に  
するから金ちょうだい。」と貴志  
「えっ？何？」と私。「床屋に行くか  
ら金ちょうだい。」坊主にするって、  
もしかして陸上部に入る決心したっ  
てこと？。やっぱり貴志は走ってい  
る時が一番いい。「いや、そうじゃ  
なくて髪を毛傷んでいるから一度  
切ることにした。」と貴志。

そんな理由で髪が切れるならどう  
して四月に坊主にできなかったの！  
と憤りを感じた。

その日、彼は自慢の髪をバツサリ  
切ってきた。坊主頭の彼はさわやか  
でかわいかった。床屋では「どうし  
た？たばこでも吸ったの？」と言わ  
れ、翌日学校でも先生や友人に「何  
か悪いことしたの？」といわれたと  
こぼしていたが、鏡の中の自分を見  
て満更でもない表情の彼だった。

彼が髪を切ったと知ると周りの人  
たちは皆、「陸上部に入る気にやっ  
となったんだ」と言い喜んでくれる

のだが、その度に「それは、そうじゃ  
ないみたいでー。」と私。

二期当初も、「俺、陸上部に入っ  
から。明日先生に言ってくるから」  
と貴志。「本当？」でもまだ言わな  
いでよ。九月の誕生会の時に皆の前  
で言うから」という彼の希望があり、  
それまでは秘密にしておく事にした。  
ここで一つ問題があった。それは陸  
上部が彼を受け入れてくれるかどう  
かということである。口下手な彼が  
顧問にきちんと意志を伝えることが  
できるかととても心配だった。「今日  
は顧問に言うから」と言って登校し  
た。一日目は、顧問の先生がみつか  
らなくて断念。二日目は会議があり  
6時まで待っていたが会えずに断念。  
三日目にやっと顧問の先生と会えて  
入部したいことを伝えてきた。答え  
は、一ヶ月間今の剣道部での彼の態  
度をみて、その後剣道部の顧問とも  
相談の上決めるということだった。  
少し出遅れたが、夢をあきらめずに  
いた彼に拍手を送りたい。彼がまた、  
嬉々として走っている姿を見たい。

倉沢 智子

光の中で

佐藤家

『二年目は演技派』

ワタクシ、下山は佐藤家に二年  
目を迎えた。引き続きの家なのだが  
去年とは一転してチビちゃんたちの  
一番多い構成となり、明るさと騒が  
しさの交錯が倍増したから大変の一  
言である。救いなのは大きい子たち  
の思いやりに満ちた手伝いであるこ  
とも加えておく。担当のいない夜は  
同室で寝るようになっていくらかは  
去年より家にいる時間が長くなった。  
一年がたち自分なりに「さあ、こ  
れから」と意を決した時、私の周り  
は何とも言えないツメタイ風が吹き  
荒れていることに気づいた。

「本当のことを言ったことがある  
か？」「やる気を持っているの？」  
それは佐藤家の子どもだけでなく、  
光の子どもの家が抱えている共通認  
識だったとは。何と保母たちもが！。  
この夏、それを裏付けるような事  
件が起きた。私は、小学生と信州赤

岳に登った。これは、夏休みの行事

のひとつとして企画されたもので、  
職員会議で何度も協議した。われわ  
れの採用するコースが最難関で最も  
長い鎖場がある程のものだった。そ  
して、心配の種は山登りを重ねてき  
た子どもたちではなく、私がちゃん  
と登れるのか、であったのである。

当日、子どもたちから「僕たちに  
迷惑かけないで」の声、声、声。

そして、誰よりも確実に無事、登頂  
達成！。初めての登山だった私は、  
本当に嬉しくまた、ほっとする思い  
だった。ずいっと、誰にも世話にな  
らずに登れるか心配だった。皆、同  
じ思いだったろう。

それにしても、私への言葉は、評  
価や賞賛ではなく、「登れないフリ  
して演技だったんでしょー。」と大  
人を含めての声、声。それがボカー  
ンと頭の中でこだまするのであった。  
山頂から見える夜空を見上げ、私  
は一体ナニモノだったんだらうと、  
ナミダながら星に問い続けた。

後日知ったことだが私が登れるか  
否かで賭けていたとのこと。賭けの裏

ひかりのこ

美は赤飯だった。めでたい二年目  
はある。

下山 英哉

子どもたちの季節

仙道家

果てしなき挑戦？

果てしなき絶望

夏休み。思春期の子どもたちにとっ  
て「格好」の舞台。1年前の夏に実  
習に行った足立児童相談所の一時保  
護所は「もてあまされた」少年たち  
でいっぱいだった。そして、今年の  
夏、所沢児童相談所の一時保護所も  
満員だったという。

大学三年の時刑事政策の授業で  
「高橋良彰の社会的政策理論におけ  
る非行の発生と抑止の理解」という  
講義を受けた。

犯罪、非行を行おうという意志決  
定は認知された制裁によって強く影  
響されている。一般青少年の場合に  
は、公的社会的制裁Ⅱ国家による刑  
罰よりむしろ、「家族との関係がま  
ずくなる」「クラスの友達と関係が  
まずくなる」「将来の進学や就職が  
難しくなる」などの非公的社会的制  
裁が非行抑止としての効果を発揮し  
ている。一方非行を行う者にとって

は、公的社会的制裁の不認知はいう

までもなく、非行的社会的制裁をう  
けても辛くないという認識などのた  
めに社会的制裁の非行抑制効果がほ  
んど見られない。すなわち、犯罪  
に踏み切る者は非公的制裁の威嚇が  
余りひびかない環境にいるか、もし  
くは本人自身が非公的制裁をうけて  
も、それによる損害、損傷、損失が  
一般青少年に比べて小さく済むよう  
な場面にいる。そのため公的制裁を  
十分に認知し、非公的制裁がほとん  
ど影響しない環境や属性を持つ者へ  
の制裁の犯罪に対する予防効果には  
限界あると言わざるを得ない。

人はいったいどこまで互いを認め、  
許し合えばよいのだろうか。聖書に  
あるように「七の七十倍まで」であ  
ろうか。だが、吉本隆明は『マチウ  
書試論』でその箇所には「果てしな  
い絶望が隠されている」と述べてい  
る。誰でも「絶望」や「限界」など  
は信じたくない。しかし、現在のと  
ころ「非行抑止の限界」のあること  
を認めている「高橋理論」の壁に押  
しつぶされそうである。

私が児童の養護に携わっていくと  
いうこと。それは、「高橋理論」へ  
の果てしない挑戦になるのであろう  
か。

村上 勇

原田家日記

わたしの兄弟たち、色々な試練に  
出会うときは、この上ないよろこび  
と思いなさい。信仰が試されること  
で忍耐が生じるとあなた方は知って  
います。あくまでも忍耐しなさい。  
そうすれば、完全に申し分なく何一  
つ欠けた所のない人になります。  
(ヤコブ1・2-4)

この仕事を始めて今年で6年たち  
ますが、この夏休みは自分自身の信  
仰が試された時もありました。  
私の日々の目標として「御心なら  
ば何でも従順に行います」をかけた。  
夏休みの目標として、「すべてに感  
謝」としました。

しかし、言葉とは全く逆なこと  
をしていたように思える。愛がなく、  
人を裁き、不平不満を言うものでし  
かありませんでした。

主イエスがゲッセマネの園で「父  
よ、できることなら、この杯をわた  
しから過ぎ去らしてください。しか  
し、わたしの願いどおりではなく、  
みこころのままに」(マタイ26・  
39)と祈られました。

この杯とは、辛い体験のことです。  
しかし主イエスはすべて天の父な  
る神の御心に従いました。

私にとって、この夏休みの様々な  
試練の時に、忍耐することなくただ  
逃げて通り過ぎる事がいかに多かつ  
たことか。主のみ言葉は、力がある  
もので、み言葉に従っている時は喜  
んで生きていられます。しかし、み  
言葉から離れ感謝の気持ちを怠ると  
心が痛み喜びが消え去ります。人を  
裁き、快くない相手を心から追いやっ  
てしまいます。

主イエスは、人々からのけ者にさ  
れた人々に対し手をさしのべ、輪  
の中心に持つてきて下さいました。  
しかし、私のとった行為はイエスを  
十字架につけると叫んだ民衆たちの  
ようにずるく、本当に弱い人間だっ  
たのです。そんな自分がいやになり  
「わたしは、子ども達と共に暮らす  
資格などない」と思い悩む日々が続  
きました。そんな状況の中、祈るし  
か解決の手段がないと気づき、教会  
で声をあげて自分自身の悔い改めの  
祈りと子ども達への取りなしの祈り  
を捧げました。祈り終わると心が本  
当に平安になり、今では、心配され  
た出来事が良い方向に進んでいます。  
主に感謝し、この小さな者を用いて  
下さる神に従い、純粋な柔らかな心  
を持った子どもたちと共に歩み続け  
ていこうと思います。 穴水 祐介

現場から

# のびやかに ふくよかに IX 笹山 恵理

澄んだ空にコスモスの笑顔がこぼれる季節。園庭には季節をずいぶん過ぎてしまったつくつく法師が、それでも爽やかにあたりの空気を震わせています。

皆さまお風邪などお召しにならず元氣にお過ごしでしょうか。

今回も小さな私のつぶやきにおつきあい下さい。

さて光の子どもの家では、たいてい初夏と初秋の年に二回、四日程の連休がローテーションされます。

自分の連休ですら思いつき羽を伸ばして、いつもはできないことをしよう！。会えなかった人とも会いたい！、と思いが巡るものです。

同じ家を担当している保母や指導員の連休だと、『ゆっくり休んで下さいね』と思う反面、『その人の担当している子どもたちのケアをどうしようか』とか、『もめ事が起きたらどうしようか』とか、いつも助けられている多くの部分があからさまになって、緊張もします。

そして何よりも、暮らしの中で誰かがいないというのはやっぱりどこか物足りなくなります。

今朝、庭へ出ると、隣の家で暮らす三歳のおませな洋君に会いました。

「恵理さん」と私を呼ぶ洋君。

「おはよう」と手を振ると洋君もニコニコと「オハヨ」と手を振り返ってきます。

うーん、何て可愛い！。いつもならそれで終わりなのですが、今朝は何やらトコトコとかけよって足にピッタリとまとわりついてきます。「あのね、あのね」どうやら何か話したいことがある様子。

「なあに？」と、聞くと、またニコリ笑って「あのねー、まいこちゃんねーガム買ってきてくれたの！。ガム！」。

はーん、なるほど。そういうことか。今朝、連休を終えた洋君の担当さんが帰ってきたんだ。

朝一番からの極上のニコニコ顔にそういう理由があったのね。

「よかったねー洋くん、まり子さんが帰ってきたんだね。」そういう私の決まり文句にはすでに耳に届かず、洋くんはこっちだあっちだとピョンピョン飛び跳ねています。

こんな場面に出会うと、微笑まし

く、暖かさをわけてもらったという思いになります。

しかし、その反面、子どもは誰かに寄りかかなければ育ってゆけない、ということをお願い知らされます。その誰かが、子ども自身が最も心を寄せる、あるいは一番に思っている人でもなく、例えば最も近くにいてのが私のような者であっても求めずにはられないという現実になくなってしまふのです。

もちろん、だからこそ生き延びていけるのだと思うのですが、それほどに子どもは弱く、守られるべき存在なのだということをひしひしと感じます。

そして、過去ではなく今、この瞬間を生きている子どもたちにとって大切なのは、誰よりも、今、隣にいてる人に一番大切に思われることなのだと強く感じるのです。

子どもたちは現実的にそのような人の手を、眼を、心を、胸の熱さを求めます。それを供給することが私の『仕事』なのです。

今朝の洋くんのしぐさや動き、あるいは表情など全身は、改めてそのことを私に知らせてくれたのでした。さて、当の洋くん。しばらくピョンピョンと飛び回っていましたが、遠くに洋くんの担当のまり子さんを

見つけて、極上の笑顔をして見せ、「ガムもらったんだよ」と、うたうような声を残してまり子さんの方へ走っていつてしまいました。

私の担当のみーちゃんはどうだろう？、足りないことばかりではないだろうか・・・。

珠弥ちゃんは・・・一番大切にされていることを感じてくれているのだろうか・・・。

鷹貴君は・・・美季の次の、あるいは珠弥の次の・・・そんな位置にいるわけではないことを識っているだろうか・・・。

今までの自分と今の自分を振り返り、見つめたくない内面と向き合い、足りないものを充填させて、子どもたちとともに暮らすことのできる、そして与えられた『仕事』をこなせる人であろうと、思いを新たにしたら朝だったのです。



ひかりのこ

養護メモ 63

## 家族 その十八 『情緒17』

ここにいる子どもたちは、何らかの意味でみな心に傷をもっている。

何があってもなくても疑いようもなく自分を根底から支え、守ってくれる筈の家庭から隔てられ、溢れるような愛を基本として関わりが展開するはずだった家族関係の崩壊の過程に巻き込まれた上、そこから切り離されて、見たこともない場所に関係のない人々と暮らさなければならぬことは、幼く、年若い子どもたちにとって、それはそのまま最も柔らかな時期の心に手ひどい深傷を負わせることに他ならない。

大賀誠は、五歳の時に兄と共に入所してきた。

はじめの頃は些細なことでの兄弟喧嘩など引きも切らず、『死んでしまえ！』『ぶっ殺してやる！』など、それ以外表現の方法を知らないような乱暴をさわる言動が彼らの生活を支配していた。些細な注意でも、怒られたなどを受けとめるので強い表現は避け、訂正や変更なども優しい言葉でのやりとりを心がけ、普通の人間らしい生活の再体験によって当たり前の生活感覚や情緒を養うこ

とをめざしてきた。

祖母や叔母などが「別な子どもになったようだ」と、来訪や帰省、あるいは訪問時などに必ず感謝したのはこの頃からである。

誠は細身に神経質だが、無口でおとなしかった。入所が幼児であったこともあり、担当保母に抱っこや添い寝などの甘えやスキンシップを要求し、公休で出かける保母の後追いをするなど比較的普通の生活行動を早く獲得した。

小学生の時の教師は、「授業中はボーッとしている。やれば出来るし理解力は充分ある。友だちにちょっとしたいを出したりすることがあってトラブルになると収まりがつかない。」と言った。

小学高学年には、級友などとの喧嘩が激しいものになり、容赦しない残酷さを呈した。ある子どもが誤って誠の顔に泥を跳ね上げてしまった時に、怒り狂って無抵抗の相手を殴り蹴りし、しまいは担当保母のところを走り逃げ帰ったこともある。

この兄弟に特徴的な爆発的な状態にはタイムアウト（離れて独りに）

して落ち着くまで待ち、落ち着いたら受け入れて一緒に静かに振り返るようにとの、児童精神医の菅野圭樹先生の助言を得て対応した。そんな時に誠は、大きなドアをカッターナイフで切り刻んだり、庭の垣根を抜き壊してしまうことがあった。

中学生になり、神経質な表情と乱暴な言動がつのり、舌なめ症（鼻の下や唇の下などが爛れるまでなめる）などが頻発し、中学二年時には、当たり前のことだが、特にこの兄弟には激しい言葉や殴るなどの暴力的な対応は決してしてはいけないことを確認して関わっていたことから、新しい指導員が誠に殴られる事件が起きた。祖母宅に帰らせて叔父叔母などの協力を求めて関わったが、この兄弟の特徴となっていた、決して内省したり謝ったり出来ない状態は変わることはなかった。三年の夏には、壁や襖、障子などに無数の穴をあけて引き籠もるようになった。

誠から菅野先生の診察を希望した。人格障害（境界例）と診断され、祖母や叔父叔母と話し合い、祖母の元に引き取って暫く休ませるというこ

とで三年生の半ばで家庭引き取りとなった。

その後、蠅がうるさい、飯が冷たいなどと祖母に文句を言い、祖母宅の壁を打ち破ってしまうことなどがあり、駆けつけて叔父叔母の協力も得ながら対応した。受験時には小高を得て、無事に高校に入学した。高校一年生の夏に来訪し、成績表を見せてくれたが、レベルの高い学校ではないがクラスで上位の成績を得ていた。心の傷が癒え思春期の嵐を乗り越えたように思えないが、その方向で成長してほしいと心から願っている。

傷を負った者には乱暴な対応ではなく、優しさや受け入れて愛することなど情緒的な対応や、期待して励ますこと、あるいは癒えるまで時間をかけて待つことが基本だろうと考えてきた。

それは、抱けば皮膚が破れ血が流れる刺だらけの子どもたちを、どれだけ力を込めて抱き続けることが出来るかどうかなのであろう。

誰とも取り替われない、かけがえない愛する家族の一人として。

菅原 哲男

1997年度も  
基準外職員確保のため  
バザーを行います。  
不要品などのご協力を  
よろしくお願いします。  
連絡先：光の子どもの家  
バザー実行委員会

中古車ご提供  
ありがとうございます。  
山家様三様  
ハ郎鳩教会様  
感謝

日誌抄 = 暮らしの風景 =

1996年 6月1日 ▶ 7月31日

- 6月 幼児5名(幼稚園1名)小学生10名 中学生10名  
高校生5名 在籍総数30名 (男16、女14)
- 3日 光の子どもの家後援会総会。昨年度の事業報告と決算の承認と新年度の事業計画と予算案の承認。
- 4日 原道小学校の先生方の家庭訪問始まる。思いがけずにがんばっている子どもや、調子に乗れずに不安定な子どもたちの様子をうかがい、対応を熱心に協議。
- 7日 熊谷児童相談所相談指導課長、福祉司が来訪して森光子についてのケアプランについて協議。
- 8日 第3回定員外職員確保のためのバザーを実施。光の子どもの家後援会役員の方々の手打ちうどんやしずくの会のところ天や中華饅頭など大好評。3回目ということでだんだん地域に根ざしはじめ、買い物にやってきて下さる方々も随分増えました。全国からの豊富な寄付物資も強みになっております。感謝。
- 9日 日本キリスト教団岩槻教会青年・高校生会の皆さんが来訪して子どもたちと交歓のひととき。感謝。
- 16日 菅野圭樹先生来訪して子どもたちの精神衛生についての問診と診察とスーパーヴァイズ。遠いところからおいで下さり、長時間に及ぶ関わりに感謝。
- 18日 越谷児童相談所より来訪して子どもの情報交換と養育についての協議。
- 20日 不安定で放浪を続ける高校1年生について相談と協

議のため所沢児童相談所に。

- 26日 増田博氏よりトマトをたくさん。感謝。  
○ 第6回グループホーム研究会。湯河原で。菅原、倉沢、村上が出席。
- 28日 仙台キリスト教育院の大塚喜和子保母他1名が2泊3日で情報交換と養育についての研修を、ともに。
- 7月  
1日 北海道、東北方面を皮切りに、お盆帰省をできるだけ意義深く実施するために家庭訪問開始。
- 7日 仙台市山家氏より乗用車をいただく。
- 16日 栗橋町八百亀さんよりメロンをたくさん。感謝。
- 17日 麺類業組合青年部(会長柴田朝尾氏)の朝霞、志木、和光、新座など県南4市の有志が今年も手打ち蕎麦会を実施して下さい。光の子どもの家後援会(会長金子嘉男氏)の役員方が朝から準備。篠崎忠広氏のアレンジで、子どもたちを中心にした実質的な、そして贅沢な一挙。名人たちの心意気を満喫。
- 19日 原道小学校全職員が来訪して教育懇談会。熱心に。  
○ 夏休みオープニングフェスティバル。
- 20日 元タカラクラブの松永美千代氏よりすてきなバースデープレゼントが大阪千沙ちゃんに。感謝。
- 29日 小学生の八ヶ岳登山。谷本清光画伯や池端寛氏のご協力。赤岳の最難関ルートの登頂に成功。

反 射 光

☆日毎に深まってゆく秋の気配の中に子どもたちの表情に取り戻した落ち着きを感じております☆物思いに耽る子どもたちの胸の奥があらさまにされ、これまでの生活の過程がまざまざとよみがえるからでしょう。誇らしさよりは落ち込んでしまい、原因不明の不機嫌をまき散らしてしまふ思春期真っ直中の子どもたちです☆そのなかには、してはいけない遠回りをしながら、これから先をじっくり展望して歩き出す者も出てきました☆そんな子どもたちの心の振幅に追いつけず、うろたえることしばしばですが、皆さまの熱いご支援に励まされてこの年度も半分を終わり、残りの半分で春に願った成長を果たそうと励みます☆どんなに心の寂しい子どもたちであっても、幼稚園から高校までの運動会や文化祭、体育祭で見せる一途さに同調するとき、何と素晴らしい子どもたちであることよ!、と熱く感動してしまいます☆そんな『とき』を限りなく殖やしていくための関わりに、乞う、更なるご支援を!

(哲)